



イケケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 607 回 上原ひろみの音の世界

2014.12.14

「上原ひろみ:ザ・トリオ・プロジェクト」なるコンサートへ行った。
会場の「東京国際フォーラム」ホールAは、5千席を超える世界でも有数の座席数を誇っている。
このホールが、開演5分前には一分の隙もなく、満席となった。
幼少からヤマハ音楽教室で育った彼女は、ボストンの名門・バークリー音楽大学を首席で卒業という、小曾根真(ジャズピアニスト)以来の快挙を成し遂げている。

JAZZ ピアニストという看板だが、彼女の音楽を初めて聞く小生には、全くジャズには聞こえない。
黒人音楽特有のファンキーさはないし、響きも決してジャズ風ではない。
オスカー・ピーターソンのスイングも、極、稀にしか聞こえてこなかった。
とにかく驚異的テクニシャンである。

クラシックではよく「超絶技巧」などと表現するが、そんな言葉からはみ出すような驚愕の一言、「指がどう動いているのか分からない」と思うほどの速弾きと華麗なテクニックに圧倒される。
小柄な彼女が、立ち上がったたり、足を踏み鳴らしたり、鍵盤に肘鉄食らわせたりしながら、一見派手に見えるオーバーアクションは、演技でなく、彼女流の自然な動きなのかもしれない。
「なるほど、ピアノは打楽器なんだ」と再認識した。

A・ジャクソン&S・フィリップスと、トリオを組んでいるドラムスとベースギターも半端じゃない。
これほど完成度の高いトリオは、そういないと思った。
ピアニストとしての表現力、トリオとしての密度、いずれも超一級である事は間違いない。

彼女の音楽は、ジャズっぽいけど、ジャズではない。
迫力あるワイルドな演奏に見えるが、その曲作りは実に繊細で、構成形式はしっかりできている。
提示部、展開部、再現部という三部によって構成されており、再現部の後に結尾部(コーダ)が付属する場合があります、正に「ソナタ形式」そのものだった。

その合間に盛り込まれる即興演奏は、アドリブ(ad lib)というよりまるでカデンツァ(cadenza)。
「上原ひろみ」にしかできない世界であり、自己の音楽を強烈に追求しているところは、これからも多くの人から愛され、高く評価されていこう。

「上原ひろみ」に音楽のジャンルは無意味だと思う。
ジャズだ、クラシックだと、やたらカテゴリー分けが好き日本人、特にうるさ型のジャズ・ファンからは、これはジャズではないといった批判が聞こえてくるが、そんなこと、どうでもいい。
これまで誰も聴いたことのない音楽を創り出すことで、芸術の進化にチャレンジしていると思った。

曲目ごとの詳細なプログラムがないので、定かでないが、彼女の口から「FIREFLY」(蛍)と聞こえた曲を、静かに、極小のピアノで弾き始めた。瞬間思い浮かんだのは、チェンバリズムの巨匠・ドメニコ・スカルラッティだった。この愛(いと)おいしい曲に…乾杯である。